

## グローバル資本主義と段階論——グローバル金融危機・経済危機を中心として (日本語要旨)

法政大学教授 河村哲二

この間20数年間にわたる「グローバル資本主義」の展開は、企業・金融・情報のグローバル化、政府機能の新自由主義的転換、冷戦の終結、新興経済の登場、世界的政治・軍事フレームワークの転換など、広範かつ多岐にわたる顕著な現象を伴って進行し、1970年代央を境とした戦後現代資本主義の大きな変容と転換を示すものである。なかでも2008年秋からとみに深刻化したグローバル金融危機・経済危機は、金融・実体経済への影響の深度とグローバルな広がりとは極めて大きく、グローバル金融危機・経済危機は、「百年に一度」(Greenspan[2008])、「世界大恐慌以来最悪」(Geithner[2008])とされるように、資本主義世界編成そのものの解体を招いた30年代「世界大恐慌」型の「構造的恐慌」として、戦後現代資本主義の変容を端的に示す現象である。その意味で、マルクス経済学の「恐慌論」として解明することが最も妥当するが、しかし原理的「恐慌論」に解消して解明できるものではない。資本主義の原理として解明される諸カテゴリーと、その体系的連関の総体として現れる資本主義の原理は、あくまでも「学史的抽象」(マルクスの「経済学批判」の方法)によって与えられた抽象概念であり、現実の資本主義ではそのまま存在しているものではない。日本における独自の理論的發展である宇野理論によるマルクス経済学の体系的整理にたった「段階論」の方法による「グローバル恐慌」として解明されるべきものである。

本報告では、そうした視点から、第1に、宇野理論系の既存の「段階論」を、原理論体系にまで遡って解明される資本主義の「制度形成」のロジックとダイナミズムを基本として、「景気循環論アプローチ」——景気循環の態様の変容を基準にして現実資本主義の蓄積体制(資本蓄積の構造とメカニズム)を析出し現実資本主義の歴史的発展段階を規定する方法——による総合化という点から、「パックス・ブリタニカ段階」・「パックス・アメリカーナ段階」論に再構成し直すとともに、第2に、現代資本主義の現局面である「グローバル資本主義」の展開を「パックス・アメリカーナ段階」の「変質局面」として明らかにし、今般のグローバル金融危機・経済危機は、そうしたパックス・アメリカーナ段階の変質局面としてのグローバル資本主義の展開を通じて出現したグローバルな規模の新たな資本蓄積体制(構造とメカニズム)である「グローバル成長連関」——「グローバル・シティ」の重層的発展と「新帝国循環」の複合的連関——そのものが発生させた「グローバル恐慌」として明らかにする。